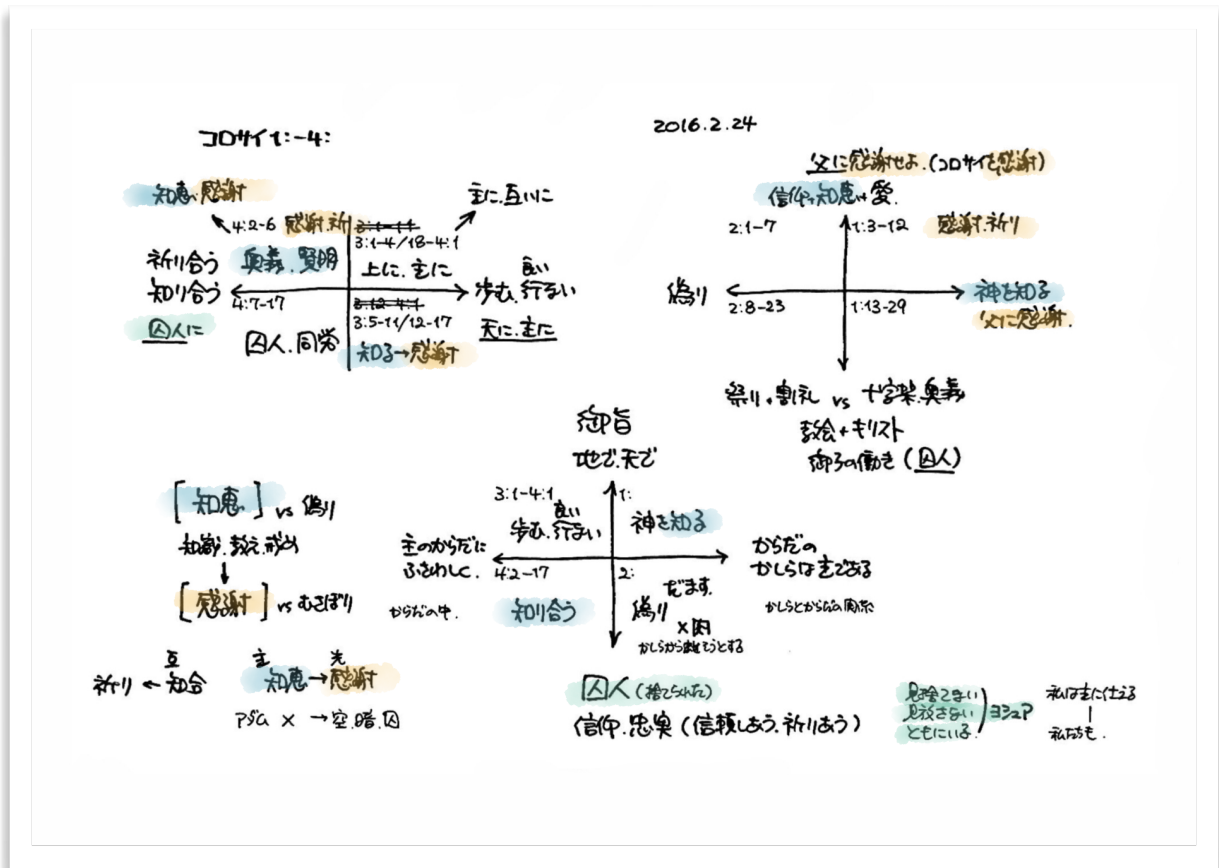




### コロサイ人への手紙 1-4章 コロサイ人への手紙



コロサイ人への手紙の分析をしてきました。苦勞しているところで、まだ全体として65点ぐらいの感じですかね。

前半、後半で、前半は神を知ること、後半は最後のお互いの名前が出ている挨拶が長いこと。キーワードとして、ガラテヤ・エペソ・ピリピ・コロサイで見ると、コロサイは、「知識、知恵、神様を知ること」これが他の手紙よりも多いということです。特に、コロサイの祈りの1章9節から12節までのところを見ても「真の知識に満たされるように」ということが強調されていることがわかります。それと共にもう一つ特徴があると思っているところは、主に感謝するというよりは、「天の父に感謝しなさい、感謝しています、感謝を捧げることができるようになりますように」が、3節、12節にあります。それと、2章の7節にも「あふれるばかりに感謝しなさい」ということがありますね。それとエペソにもあるところですが、3章16節、17節、「キリストの言葉をあなた方の内に豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。あなたがたのすることは、ことばによると行いによるとを問わず、すべて主イエスの名によって成し、主によって父なる神に感謝しなさい。」ここは、エペソと似ているのですが、特に強調されているのが、コロサイの1章28節「このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くしてあらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。」という奥義の話ですね。それと3章16節、17節の「キリストのことばを知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め」というところ。この

言い方はエペソには入ってないところですね。知恵。最後の教えのところも、「目を覚まして感謝をもってたゆみなく祈りなさい。祈ってください。」というこの知恵。神様を知ってるがゆえに感謝に至るといふ、この知恵を教えてくれるコロサイ。偽りと戦っている。偽りと本当の真理の知恵で戦っている。神様を知っているというところから離れない。だまされないで、感謝に至るといふのが、このアダムの罪のところです。神様に善悪の知識の木を与えられているのに、主を知ることなく、感謝を捨てて、暗闇、虚しくて囚人となってしまったということに対して、主を本当に知っている。その知恵があるのであれば、光の子供として感謝するいうところにあるでしょう。お互いに今度は

知り合うことになりますね。本当に知り合うということになりますから、この祈り合うというものが、最後の挨拶のところ。本当に知恵があるならば、互いに祈り合う。囚人になっていたとしても、囚人ですから、捨てられている。神様に捨てられたかのような人たち。この世に捨てられた人たちが、本当の自由人であるということに信頼して知り合う、祈り合うというところに至るといふところが、エペソでやっていた「みこころが天で行われるように地でも行われますように」といふこと。それが1章と3章。そして、2章と4章のところは、戦いが書いてあるよね。ヨシュアの言い方のような感じだったんでしょ。前はね。「強くあれ雄々しくあれ」。今度は囚人になっているということですから、見捨てない、見放さない、共にいる。囚人になって鎖に繋がれていたとしてもいふのは、コロサイじゃなくて、エペソだと思いますけども、囚人であったとしても、私たちはあなたと共にいますということ、この4章のところで、特に強調されていることだと思います。

かしらから離そうとする。かしらとからだの話が出てくる。かしらから離そうとする。「だまされてかしらから離されてしまうという事に気をつけないといけないこと」と、「からだ自体が一つであるという、知り合っているということから離れないように」といふ両方の戦いがあります。

ヨシュアの時も、「私は主に仕えます。私と私の家は主に仕えます。」と言った時に、民は「私たちも主に仕えます」といふことを誓うでしょ。かしらであるヨシュアから離れない。ここも知り合うところで、パウロやエパfras。エパfrasもキリストの奴隷と言ふのです。キリストのしもべエパfrasということですので、キリストのしもべ、パウロ。キリストのしもべといふふうには言わないで、この手紙の中では、囚人といふ言い方をしますよね。囚人であるキリストのしもべ、エパfrasというそのリーダーから離れないといふ話と、お互いにラオデキヤの教会、近くにある教会と離れないといふようなところが、ここに出ているところだと思います。

みこころが天で行われ、地で行われているはずなのに、囚人となっているといふことを、違うものだといふ風に見えたとしても、信仰をもって信頼し合う、祈り合うといふことが、この義なのでしょうね。「御国と義を第一に求める。憐み合う。信頼しあう。」といふところに現れているんだと思います。

1章から2章までと、3章から4章までの分析がここにありますけど、この上の段は「父に感謝しなさい」。コロサイに対するコロサイを通してあらわされてることは、感謝していますといふ父に感謝しなさいといふことに対して、御子の働きが後半（下段）に出ますよね。十字架と復活の話で、教会がそこから離れないといふ御子の働きが書いてありますけど、ここは御子の働きは、囚人としての働き。奴隷になったしもべになった働きといふことが、強調されているかと思ひます。

後半の方では、天の関係。主に従うようにといふ3章1節から4節と、18節から4章の1節。それと、囚人であり同労者であるといふ、その「互いに」といふところのリーダー

との関係で一つになりますということと、どうを歩むのかということですね。奥義を知って、知恵をもって歩む。知っているので感謝して歩むという歩み方というところが、後半になっているような感じですね。

よく言われる1、2章は教理で、3章からは実践みたいなことを言われたりしますが、1、2章は、かしらとの関係が中心に書かれていて、3章からのところは、そのキリストのからだの中的一致ということが強調されているのであろうというふうに思われます。エペソと一緒に、もう一度見直すと、もっとはっきりしてくるのではないかなと考えています。